２０２６年度

第１回

一般・Ｇ　２科４科英検利用

入学試験問題

国語

試験時間　４５分

注　意

- 試験開始の合図(あいず)があるまで、この問題冊子(さっし)を開いて見てはいけません。
- 問題は一から四まであり、全部で13ページです。足りないページや、印刷が分かりづらいところがあった場合は、手をあげて監督(かんとく)者に申し出てください。
- 解答用紙と問題冊子の決められた場所に受験番号を記入してください。
- 答えはすべて解答用紙の決められた欄(らん)に記入してください。
- 答えを直すときは、きれいに消してから新しい答えを書いてください。
- 試験終了後、監督者の指示にしたがって解答用紙を問題冊子とともに提出してください。
- 特に指示の無いかぎり、句読点や記号は１字で数えます。

佼成学園女子中学校

受験番号	

一

①～⑩の――線部のうち、カタカナは漢字に、漢字はひらがなに直して答えなさい。

① 家族の協力にカンシャする。
② あなたはとてもセイジツな人だ。
③ 市長の残したコウセキはすばらしい。
④ 実力をハッキして見事に合格した。
⑤ しっかりと本番にソナえる。
⑥ 質問の意図を確認する。
⑦ とても貴重な機会だ。
⑧ 自分の行動を深く省みる。
⑨ 自らの失敗を潔く認める。
⑩ 悪いさそいをきっぱりと断る。

二

――線部の言葉と同じ意味や使い方のものを、それぞれア～エから一つずつ選び、記号で答えなさい。

(1) 先生に絵が上手だねとほめられる。
ア 校長先生がこちらへ来られる。
イ 苦手なものも食べられる。
ウ 旅行で見た景色が思い出される。
エ 友だちに名前を呼ばれる。

(2) この公園にはベンチがない。
ア 人に迷惑をかけることはしない。
イ これを買うほどのお金はない。
ウ スマホを長い時間は見ない。
エ お金持ちが幸せだとは限らない。

(3) どうやら雨が降っているようだ。
ア この夜景はまるで宝石箱のようだ。
イ あたかも天使がそこにいるかのようだ。
ウ ロケットの打ち上げは成功したようだ。
エ 君の絵はさながら生きているようだ。

(4) 明日のテストは延期されるそうだ。
ア 今にも雨が降り出しそうだ。
イ あの人はアメリカの歌手だそうだ。
ウ この料理は真っ赤でとてもからそうだ。
エ まもなく会議が始まりそうだ。

(5) 私の話していることは事実だ。
ア 冷たい雨の降る夜はさみしくなる。
イ 英語を話せるのでうまく案内できた。
ウ 三度の飯よりねるのが好きだ。
エ 修学旅行の用意を早く始める。

三

次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

【場面A】では、自分の名前に抵抗があり、過去にクラスメイトからばかにされた経験がある中学生の「わたし」は、放課後の教室で倉田さんと出会います。その数日後を描く【場面B】では、「わたし」は倉田さんから「ルイルイ」という愛称で呼ばれています。

【場面A】

「すごいね。それ、美術の課題？」

その声に悲鳴がもれそうになって、わたしは A 不意の冷気にさらされたみたいに身体を震わせながら、肩越しに振り返った。

女の子が立っていた。

知らない子だったけれど、一目見てわたしとは違う生き方をしている子だと感じた。色白で、すらっとしていて、髪をゴムでお洒落にまとめあげ、ほんの少し制服を可愛らしく着崩している。暗がりの中、彼女の周りにだけ陽が当たっているように錯覚した。きっと漫画だったら、コマをぶち抜いて登場することが赦される子だ、と思った。

彼女は自販機で買ったらしいジュースのパックを手にして、そこから伸びるストローをピンクの唇で咥えていた。大きな瞳は、わたしが机に広げているルーズリーフに向けられている。

どうしよう。

見られた。

わたしは反射的に、散らばっているルーズリーフを両腕でかき集めた。

すると、女の子が笑って言う。

「え、なんで隠すの、うまいじゃん」

「でも」

戸惑いながらかすれた声をあげると、女の子は前の席から椅子を引き出した。まるで友達の席に着くみたいな動作で、わたしの向かいに腰を下ろす。

「見せて見せて」

屈託のない笑顔を見せられて、わたしは流されるように、ルーズリーフを覆っていた腕をどけてしまう。女の子は遠慮ない様子で、そのうちの何枚かを手にすると、大きな瞳を更に見開くようにして声をあげた。

「うわ、すっご！　マジか、絵、超うまいじゃん」

一枚ずつ、それをひっくり返したり、後ろに回したりしながら、彼女は驚きの声をあげた。

「絵描くの好きなの？」

大きな瞳が、わたしの方を見る。そこで、初めて視線が合ったような気がした。狐みたいに少し吊り上がった眼で、睫毛が長かった。わたしは眼を落として、もごもごと口を動かす。

「そう……、だけど」

「そっか。マジすげえじゃん」

彼女はそう笑ったけれど、わたしの返事が悪かったのか、会話はそこで途切れてしまった。見ると、女の子はもうわたしに眼を向けておらず、手にしたルーズリーフに視線を注いでいた。

どうにも、人と話をするのは苦手だ。

小学生の頃から、ずっとそうだった。こういう子たちは、いつも教室の中で眩しく輝いていて、わたしとの関わりがあるとすれば、それはわたしの名前を口にしながら、指をさして嗤うときくらいなものだから。

彼女が手にするルーズリーフと、そこに視線を注いでいる彼女をちらりと覗く。①わたしは、自分の心臓が激しく音を立てていることに気がついた。血液が沸騰しているみたいに頬も熱くて仕方がない。妙な汗もかいていた。そんなふうに熱心な眼差しで、誰かに自分の描いたものを見られるのは初めてのことだった。

「ねぇ、これ、もしかして要らないやつ？　もらってもいい？　めっちゃイイこと思いついたんだけれど」

ふと眼を上げた彼女が、そう言った。

彼女が示したルーズリーフには、大したものが描かれているわけではなかった。ただ手を大きく描いたものだ。わたしの指を描き写したわけではなく、漫画に活かせるように※1デフォルメしてあって、たとえば美人のヒロインだったら、こんな指のかたちをしているかもしれないと、長く綺麗な指先を想像して描いたものだ。わりと乱雑に描いたし、失敗とも言えるできだったから、ほとんど落書きみたいなものだ。他人から見て、価値があるようには思えない。

「べつに、捨てようと思ってたから、いいけれど……、なにに使うの」

女の子のキャラクターなんかを落書きしたものだったら、それを持ち去られて、こいつ女のくせにこんな絵描いているんだよって、※2嘲笑される可能性もある。そういう経験があったから、わたしはじゅうぶんに警戒して彼女に訊いた。

「②練習に使うんだ」

「練習？」

すると彼女は、自分の鞄から大きく膨らんだ可愛らしいポーチを取り出した。それを机の上に置くと、なにが入っているのかごとりと重たい音が鳴った。そのポーチから次々と取り出されるものを見て、わたしは眼を丸くする。

出てきたのは、色とりどりの、魔法の小瓶だった。

小さな瓶の中に、カラフルな宇宙が閉じ込められている。魔法の言葉が綴られているみたいに、呪文のようなアルファベットがお洒落なラベルに刻まれていて、封じられた色彩豊かな宇宙の中に、きらきらと光る星々が浮かんで見えた。そんな小瓶を、彼女はいくつも取り出して並べてみせた。

なんなのこの子、魔法使いなの。

「なにそれ」

「なにって、ネイルだよ」

当然のことのように、彼女は言う。

「この絵に塗ってみていい？」

「え？」

意味がわからず、わたしは訊き返した。けれど興味を引かれたのだろう。気がつけば、わたしは彼女が並べた小瓶に視線を注ぎながら、頷いていた。

「どれにしようかな」

彼女が取り上げたのは、薄い紫の小瓶だった。慣れた手つきでその蓋をひねると、キャップの裏側に小さな筆がついているのがわかった。お兄ちゃんがプラモ作りで使っていた接着剤みたいだ、と思ったとたん、それとまったく同じ異臭がつんと鼻を突いた。

「ごめん。ちょっと我慢してね」

彼女は苦笑して、それから、細い筆の先をルーズリーフに向けた。

わたしが描いたひとさし指の爪。

そこに、筆先が近づいていく。

降りた筆がさぁっと動くと、まるで魔法みたいに、そこに宇宙が生まれた。

爪の先が、鮮やかな紫に染まって。

星々の輝きのようなラメが、窓から射し込む夕陽を浴びて煌めき始める。

「思ってたとおり、綺麗じゃん。やっぱあたし天才だわ」

【場面B】

わたしは、白いルーズリーフを取り出した。そこにドレスを着た女の子が、ちょっとやる気のないポーズで立っている。顔も髪型も、ほとんどラフで、落書きみたいなイラストに過ぎない一枚だった。

「そう。これこれ」

眼を輝かせたまま、そのルーズリーフを手に取って、倉田さんが言う。

「このままでも可愛いけどさ、これで塗ったらさ、めっちゃ綺麗になるんじゃね？」

その名案に、心が躍らないはずがない。

やってみて、と勢い込んで言うと、倉田さんは今にもポーチから溢れそうな小瓶のいくつかを取り出す。色を吟味するようにして選んだあと、蓋を外して魔法の封印を解いた。独特なあの匂いと共に、彼女の骨っぽい指が筆を操って、わたしの描いた※3稚拙な衣装を、鮮やかに色づかせていく。

まるで、流れ星が夜空に尾を引いて、線を描くように。

きらきらとした銀河が、安っぽかったドレスを輝かせる。

「すごい」

ネイルの道具が、こんなふうに使えるだなんて、想像したこともなかった。

「ルイルイも、やってみなよ」

「いいの？」

「きっとこういうのは、ルイルイの方がうまいよ」

どきどきしながら、わたしは彼女から魔法の筆を受け取った。

そっと線を引いてみると、③ドレスの余白に、宇宙が生まれる。

黒くて、きらきらして、銀に光っていた。

「もっと塗ってみていい？」

「気にしないで、どんどん使っちゃって」

わたしは、ドレスを黒く染めていく。

宇宙が広がる。

銀河が流れる。

星が輝いて。

月が煌めいた。

これを使ったらどう？　乾かして、この色を重ねてみたら？　このラメはすごいから試してみてよ。倉田さんの言葉に従いながら、わたしたちは世界に一つだけのドレスを作りあげていく。モノクロのイラストが色づいて輝き、キャラクターは生命を帯びたように、今にも動き出しそう。

わたしは、薄いピンクのマニキュアを、慎重に垂らす。

本当に慎重に慎重に。震えそうな手を静かに近づけて。

ちょん、と。

それは可愛らしいチークとなって、女の子の表情をぱっと明るくした。

「すごいじゃん」
倉田さんが興奮したように声をあげて、④わたしも笑う。
自分で描いた落書きのくせに、こんなふうに色彩豊かになるだけで、それっぽい作品に見えるんだから、不思議なものだった。しばらく、わたしはそのイラストを見つめていた。わたしと、倉田さんの作品だ、と感じた。
「ねぇ」
彼女の声に、顔を上げる。
「雨がやんだよ」
窓の外を見ると、雲が割れていて、眩しい青空が覗いていた。
（相沢沙呼「煌（きら）めきのしずくをかぶせる」）
＊作問の都合上、一部省略・改変した箇所があります。

※1 デフォルメ…絵画・彫刻などで対象の形を意識的に変形して表現すること。
※2 嘲笑……人を見下して笑うこと。
※3 稚拙……未熟でへたなこと。

問一　――線部A「不意の」、B「吟味する」について、本文中の意味として最も適当なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

A　ア　わざと起こした
　　イ　思いがけない
　　ウ　強い勢いの
　　エ　意味のない

B　ア　よく味わう
　　イ　細かく調整する
　　ウ　よく考えずに決める
　　エ　念入りに調べる

問二　――線部①「わたしは、自分の心臓が激しく音を立てていることに気がついた」とありますが、このときの「わたし」の心情の説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　絵を描いていることを倉田さんに知られたことに喜びを感じている。
イ　自分とは住む世界の違う倉田さんとの会話に不安を覚えている。
ウ　自分の絵に倉田さんが関心をもったことに興奮と緊張を感じている。
エ　自信のない絵を倉田さんに勝手に見られたことに不満を抱いている。

問三　――線部②「練習に使うんだ」について、次の問いに答えなさい。

（1）「練習」するとは、どうすることですか。本文中のことばを用いて簡潔に説明しなさい。

（2）「練習」の様子を見た「わたし」の心情の説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　一体何をされるのかと疑ったものの、自分の描いた絵が彩られる様子に感動している。
イ　もっと丁寧に描けばよかったと後悔したものの、想像以上にきれいに塗られる様子に喜びを感じている。
ウ　彼女の突然の申し出に驚いたものの、その慣れた手つきに圧倒されている。
エ　自分の絵がどうなるのか不安に感じたものの、魔法使いのような彼女の姿に驚きを隠せないでいる。

問四　――線部③「ドレスの余白に、宇宙が生まれる」とありますが、この部分の説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　ドレスの近くに宇宙の絵を描くことで、二人の作品をより神秘的なものに仕上げている。

イ　魔法の筆をあやつる倉田さんの筆づかいは、幻想的で特別な作品を作り出している。

ウ　線だけの平凡な絵が、ラメ入りのマニキュアを重ねることによって美しく生き生きとした作品に変化している。

エ　未熟だった絵を美しい色のネイルで囲むことによって、ドレスを着た女の子の表情が華やかになっている。

問五　――線部④「わたしも笑う」とありますが、【場面A】と比べて、「わたし」の内面はどのように変化していますか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　誰にも見せないつもりで描いていたいい加減な絵を見られてしまい、趣味をばかにされることをひどく恐れたが、そんなものにも倉田さんが感動してくれたことで、自分の絵に自信がもてるようになった。

イ　性格の合わなそうな倉田さんとの出会いは「わたし」に混乱をきたすものであったが、趣味を通じた交流によって閉ざしていた心を開くことができ、倉田さんと気持ちが通じ合うようになった。

ウ　突然マニキュアを塗りだす倉田さんの突拍子（とっぴょうし）もない行動にはとても驚かされたが、それは「わたし」にとって心躍るものであり、これまで触れて来なかったマニキュアの魅力を感じられるようになった。

エ　いきなり馴（な）れ馴（な）れしく話しかけてくるような倉田さんとの出会いに困惑していたが、自分のことを受け入れてくれる存在と出会えたことで、周りの人のことを信じられるようになった。

問六　本文の内容や表現について生徒たちが話し合いを行いました。これを読み、**適当でないこと**を述べている生徒をA～Dの中から一人選び、記号で答えなさい。

生徒A　私は本文三五行目の「そう……」というセリフが印象に残ったな。会話が苦手な「わたし」が、口ごもりながらもなんとか反応しようとする様子が、「……」でより分かりやすくなったように思ったよ。

生徒B　一二九行目から一三三行目の部分も特徴的だよね。一文ごとに段落が変わるところから、会話が苦手な「わたし」が倉田さんになんとか思いを伝えようと、頑張(がんば)って気持ちを言葉にしている様子が感じられると思うな。

生徒C　書き方の工夫だと、私は一三四行目にある「　」を使わないセリフも気になったよ。流れるような会話が想像できるのと同時に、二人の手によって作り出されていくドレスを見ながら心を弾(はず)ませている様子も感じられたな。

生徒D　一三六行目の「モノクロのイラストが～今にも動き出しそう」も印象的だったな。モノクロの絵がネイルによって彩(いろど)られていく様子が、倉田さんとの出会いによって変化していく「わたし」の姿に重なるように思えたな。

四

次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

次の文章は『翻訳をジェンダーする』という本の一部です。この本の著者は「わたしたちが自分自身のままでいるために翻訳にできることは何か」という問題意識を持っています。

ここで、現実の社会にいる学校の先生の話し方について考えてみましょう。みなさんの周りにいたり、これまで習ったことがあったりする女性の先生は、いつも①女らしいとされる言葉づかいをしているでしょうか？　そんなことはありませんよね？　ときには、女らしいとされる話し方をするかもしれません。でも、別のときには、男らしいとされる話し方をするかもしれません。女らしいとか、男らしいとか、そういう分類にはあてはまらない話し方をすることもあるかもしれません。

中村は『「自分らしさ」と日本語』（二〇二一）の中で、②アイデンティティは「持つ」ものではなく、「する」ものだと指摘しています。わたしたちはたった一つの固定された※1アイデンティティを持っているのではなく、人とのかかわりや状況などに応じて言葉を使い分けることで、複数のアイデンティティから選んだアイデンティティを表現してるからです。

みなさん自身のことを考えてみてください。友だちの前で見せるアイデンティティと、家族の前で見せるアイデンティティは、少し違っているのではないでしょうか？　あるいは、同じ友だちに対してでも、ときによっては違う面を見せたりすることはありませんか？　そして、（　1　）よく知らない人に対しては、また違った自分が表に出てくることもありますよね。

わたし自身はＳＮＳをやっていないのですが、みなさんの中には、毎日のようにＳＮＳを使っていて、ＳＮＳ上で見せるアイデンティティは、日常生活で友だちや家族などに見せているアイデンティティとは全く違うという人もいるかもしれません。

こう考えると、物語の中の登場人物も（　2　）一つのアイデンティティを「持つ」のではなく、その場に応じたアイデンティティを「している」ことになります。たった一つの「女らしい話し方」をするのではなく、相手やその状況に合わせて話し方を変えるはずです。

③日本語の文章を書くときには、行為の主体を省略しても意味が成り立つことが多々あります。この特徴から、物語の中のせりふが誰の発言かがあいまいになることがあります。そういう場合に（　3　）女らしい話し方をする人がいれば、読者にとって分かりやすくなることは確かです。

でも、第一章で事例を紹介したように、（あ）翻訳の中の女性たちは極端に女らしい言葉を使っています。日本語を話す現実の女性たちの言葉づかいと比較したら、「女らしい文末詞」の使用率が二～四倍弱もありました。（い）日本語で書かれた物語と比較をしたら、日本語の物語の女性たちも「女らしい文末詞」を使ってはいましたが、翻訳の中の女性たちはもっと頻繁に「女らしい文末詞」を使っていました。そして、（う）登場人物がそれぞれ違った性格を持っていると描かれていても、同じような割合で「女らしい文末詞」を使っていることも分かりました。

④翻訳の中の女性たちがとても女らしい、上品な話し方をしていることは、読者のわたしたちには当たり前すぎて気がつかなかったり、あえて意識しなかったりします。でも、「はじめに」でも説明したように、「当

たり前なこと」だと思わされていることには、※2リスクが潜(ひそ)んでいます。

中村（二〇二一）によると、二〇一五年から二〇二〇年までに使われた小学校一年生の国語の教科書の中では、何の説明もなく、女子には「わたし」、男子には「ぼく」を使わせていたそうです。女子と男子の※3自称詞(じしょうし)の違いは、調査した五社の教科書すべてで見られました。このことについて、中村はこう指摘しています。

実は、このように何の説明もなく、ある※4言語イデオロギーをそのまま反映したことばの使い方をすることは、説明がある場合よりも、より強力にその言語イデオロギーを当たり前の考え方にする。なぜならば、説明しないことによって、女子が「わたし」を使い、男子が「ぼく」を使うことは、説明をする必要もないぐらい自然なことだとすることができるからだ。

これはつまり、翻訳の中の女性たちがとても女らしく上品な話し方をすることを目にし続けると、読者のわたしたちは「こういうものが自然な話し方なのだ」と思い込まされてしまうということです。

押(お)し付けの女らしさが表れているのは、翻訳の中だけではありません。第二章では、『女のからだ』の翻訳者である秋山が、新聞記事の中で使われる女ことばに反感を抱(いだ)いていたと紹介しました。同じような例が、現在では完全になくなったといえるでしょうか？

必要以上に強調された女らしさから、それぞれの個性へ。物語やメディア、翻訳されたものの中の言葉から、一律の女らしさが取り除かれ、それぞれの人々の個性を後押しするような言葉づかいが見られるようになれば、一人ひとりが生きやすい社会にもっと近づくことでしょう。

（古川弘子『翻訳をジェンダーする』）

＊本文は設問の都合上、一部表記を改めています。

※1 アイデンティティ…自己同一性。自分らしさの感覚。
※2 リスク……危険性。
※3 自称詞……自分をさしていう呼び方。
※4 言語イデオロギー…ここでは、特定の言葉やその使い方に「～らしさ」といった社会的な意味が込められていること。

問一　本文中の（　1　）～（　3　）に入れるのに適当な言葉を次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア　たった　　イ　いかにも　　ウ　あまり

問二　――線部①「女らしいとされる言葉づかい」とありますが、その具体例として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　学校で女性の先生が使う「健康のために早寝早起きをしましょう」という言葉づかい。

イ　家庭で母親が使う「たまにはお手伝いくらいしなさい！」という言葉づかい。

ウ　物語の中で女性の登場人物が使う「あら、そろそろ食事の時間かしら？」という言葉づかい。

エ　クラスメイトの女の子が使う「昨日の遊園地、ほんとに楽しかった！」という言葉づかい。

問三　――線部②「アイデンティティは『持つ』ものではなく、『する』ものだ」とありますが、これはどういうことですか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　わたしたちはアイデンティティを所有することはできず、その場に応じて必要なアイデンティティを借りているだけに過ぎないということ。

イ　わたしたちは特定のアイデンティティだけを持っているのではなく、相手や場面によってアイデンティティを使い分けているということ。

ウ　わたしたちが持っているアイデンティティはたくさんあり、そのときの気分次第で一つのアイデンティティを選択して使っているということ。

エ　わたしたちが持っているアイデンティティは一人ひとり異なり、相手とは違うことを前提にして人間関係を作らなければならないということ。

問四　――線部③「日本語の文章を書くときには、行為の主体を省略しても意味が成り立つことが多々あります」とありますが、その具体例として最も適当なものを次の文章中の――線部ア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア屈託のない笑顔を見せられて、わたしは流されるように、ルーズリーフを覆っていた腕をどけてしまう。女の子は遠慮ない様子で、そのうちの何枚かを手にすると、大きな瞳を更に見開くようにして声をあげた。

「うわ、すっご！　マジか、絵、超うまいじゃん」

イ一枚ずつ、それをひっくり返したり、後ろに回したりしながら、彼女は驚きの声をあげた。

「絵描くの好きなの？」

大きな瞳が、わたしの方を見る。ウそこで、初めて視線が合ったような気がした。狐みたいに少し吊り上がった眼で、睫毛が長かった。エわたしは眼を落として、もごもごと口を動かす。

（相沢沙呼「煌（きら）めきのしずくをかぶせる」）

問五　――線部④「翻訳の中の女性たちがとても女らしい、上品な話し方をしていること」とありますが、このことにはどのような危険性がありますか。解答らんの形式に合うように本文中の言葉を用いて二十五字以内で答えなさい。

問六　著者は「わたしたちが自分自身のままでいるために翻訳にできることは何か」という問題意識を持っていますが、何をすればよいと考えていますか。解答らんの形式に合うように本文中の言葉を用いて五十字以内で答えなさい。

問七 ----線部（あ）～（う）は、著者が **資料A** ～ **資料D** を根拠にして明らかにした事実です。次の会話を読み、（あ）と（い）の根拠となる資料の組み合わせとして最も適当なものをそれぞれ選び、記号で答えなさい。

先生　調査の結果を正しく導くためには、適切な資料を選ぶことが大切です。まずは、（う）について考えてみましょう。

生徒　ええと……。（う）には、どの登場人物も同じような割合で「女らしい文末詞」を使っている、ということが書かれています。これは、同じ本のいろいろな登場人物の文末詞を調べれば言えることなので、資料Bですか？

先生　惜しいですね。資料Bの登場人物ごとの文末詞の割合を見ると、同じくらいとは言えませんよね。さらに、本文では（う）の少し前に、「翻訳の中の女性たちは」ということが書かれていたはずですよ。

生徒　ほんとだ！　ということは資料Dですね。翻訳小説だし、三人ともほぼ同じと言っていいくらいの割合です！

先生　その通りです。それでは、（あ）と（い）についても考えてみましょう。どちらも二つの資料を合わせないといけないので少し難しいかもしれません。誰を対象にしているのか、何を比較しているのか、ということに注目しましょう。

ア　資料Aと資料C　　イ　資料Aと資料D
ウ　資料Bと資料C　　エ　資料Bと資料D

資料A 翻訳小説の女性の登場人物の文末詞調査
①「とても女らしい文末詞」＋②「まあまあ女らしい文末詞」の割合
『プラダを着た悪魔』　43・07％
『ブリジット・ジョーンズの日記』　45・22％
『レベッカのお買いもの日記（一～六巻）』　46・36％

資料B 日本語で書かれた小説の女性の登場人物ごとの文末詞調査
①「とても女らしい文末詞」＋②「まあまあ女らしい文末詞」の割合
『あまからカルテット』
登場人物…　咲子　37・55％
薫子　22・22％
由香子　31・17％
満里子　30・12％

資料C 東京在住の標準語を話す女性の会話文の分析
①「とても女らしい文末詞」＋②「まあまあ女らしい文末詞」の割合
調査①　対象一八歳～二三歳　14％
調査②　対象二七歳～三四歳　24％
調査③　対象一八歳～二〇歳　12・3％

資料D 翻訳小説の女性の登場人物ごとの文末詞調査
①「とても女らしい文末詞」＋②「まあまあ女らしい文末詞」の割合
『ハリー・ウィンストンを探して』
登場人物…　リー　42・76％
エミー　41・38％
アドリアナ　41・95％